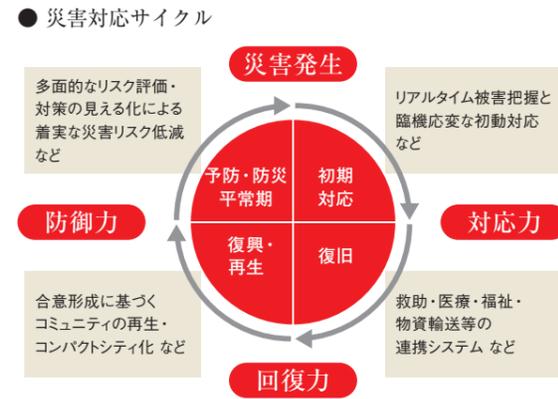


進化する災害へ対応するには
「防災教育」が最も重要

私が在籍する東北大学災害科学国際研究所は、東日本大震災の1年後に設立された機関です。従来の災害研究は、地震や津波のメカニズム、災害医療、防災対策など、それぞれの分野で別個に研究が進められていました。しかし現実の災害では、さまざまな問題が同時に発生します。そこで、この研究所では、災害科学を総合的に捉えることで、東日本大震災のような低頻度巨大災害にどう備えるべきかを研究しています。

私たちが常に念頭においているのは、「災害は進化する」ということです。地球の気候や人間社会の変化に合わせて、自然災害も対応の難しさが進化していきます。過去の災害事例から学ぶだけでなく、時代に合った防災・減災対策が必要だと考えています。

今、JALを始め、多くの方々の協力で進めている東北への「防災ツーリズム」も、これまで全く別物だった「防災教育」と「観光」を融合した新しい取り組みです。復興途中の東北で、この二つを融合させた取り組みを行うことは、大変意義のあることだと思っています。



東北大学災害科学国際研究所 (IRIDeS)

東日本大震災を経験した東北大学が、自然災害科学に関する世界最先端の研究を行う機関として2012年、宮城県仙台市に設立した研究所。自然災害にかかわる分野を総合的に研究することで、従来の防災・減災システムでは対応できなかった低頻度巨大災害にも対応しうる「実践的防災学」の創成に取り組む。



世界防災フォーラム／防災ダボス会議 @仙台 2017

東日本大震災の経験を世界に伝えると同時に、国際的な防災指針「仙台防災枠組 2015-2030」の推進を目的に開催される国際フォーラム。国内外から産・官・学・民の防災関係者が集結し、最先端の防災について議論するほか、被災4県と連携したスタディツアーやエクスカージョンなども実施される。



防災対策は自然災害だけでなく、テロや人災への備えにもなる

自然災害というものは、完全に防ぐことは不可能です。では、どう備えればいいのか。私は、臨機応変に危機に対応できる人づくりに尽きると思いますが、災害時、被害の軽減や救命につながるのは、防災設備や警報システムだけではありません。状況を大きく左右するのは、人間の知恵と判断力なのです。

また、私たちが「災害対応サイクル」と呼んでいる危機管理対策があり

ます。これは、災害を「事前」「災害直後」「復旧期」「復興期」の四つのフェーズに分けて、それぞれの段階ごとに必要な対策を導き出すという考え方であり、自然災害だけでなく、世界で頻発するテロや人災への対応にも通じる普遍的なものです。

自然災害が多く、さらに災害科学、防災技術、防災教育が進んでいる日本が今、海外の人々にも向け「防災ツーリズム」を提案することは、世界の防災意識を高めるうえでも、とても大切なことだと思っています。

東北大学災害科学国際研究所 所長 今村 文彦

いまむら・ふみひこ ●防災研究の第一人者として、津波警報体制、ハザードマップの作成、総合防災対策などを研究。専攻は津波工学。平成28年度防災功労者内閣総理大臣賞受賞。2017年11月に仙台で開催される「世界防災フォーラム／防災ダボス会議@仙台」の実行委員長や「一般社団法人防災教育普及協会」の設立呼びかけ人も務める。



東日本大震災の経験を国内外へ発信

東北の地域創生を後押しする「防災ツーリズム」とは

訪日外国人観光客数の拡大に向け、今、国をあげての取り組みが各所で進んでいます。そんななか、JALは東北地方の創生を目指し、東京や京都に集中しがちな訪日外国人を東北へ誘客する取り組みを始めています。その一つが、東北大学などと連携して進めている「防災ツーリズム」です。防災教育と観光を融合させたこの新たなツーリズムの意義を、連携先である東北大学災害科学国際研究所所長の今村文彦氏に伺いました。





災害の脅威を五感で感じ取れば 防災への「気づき」が生まれる

防災教育で「防災ツーリズム」が効果的だと言える理由の一つに、自然災害の脅威を「五感」で感じられるという点があげられます。

東日本大震災の映像は、国内外に大変な衝撃を与えました。しかし、実際に現地を訪れて、自分の目で被災地を見て、直接被災者から話を聞くと、震災に関する理解度がまったく違ってきます。被災地に行つて、実際に歩き、風やにおいを体感する。「語り部」と

呼ばれる被災者に会い、生々しい体験を聞く。そんな旅を通じて得た知識は、参加者それぞれの心に強い印象を残します。そして彼らが自分の国や地域に戻ったとき、自分たちが暮らす街にはどんな災害リスクがあるのか、どんな備えが足りないのかという「気づき」が生まれるのです。地域に合った具体的な防災対策は、そこに暮らす人々の「気づき」なくしては始まりません。

一方で、たくさんのお客が被災地を訪れることに、抵抗を感じる人もいるかもしれません。ただ、つらかった体験を人に話すことで気持ちが楽になるといふ方がいらつしゃいます。「自分が体験したことを後世に語り継がねばならない」という使命感を持つ人も少なくありません。「防災ツーリズム」では、「語り部」を志願して下さった方から話を聞くことになりませんが、被災者たちの葛藤も、事実として感じ取っていただけたらと思っています。

また、観光収入が被災地の経済を活性化させ、被災者の生活再建につながるという側面もあります。被災地の多くは、美しい自然と、海の幸、山の幸に恵まれた地域。長い歴史のなかで、自然と共存しながら作り上げてきた文化があります。参加者には、そんな東

北ならではの魅力も体験していただきたいと考えています。

「防災」を世界へ発信するには 多方面からの協力が必要

この11月、仙台で「世界防災フォーラム／防災ダボス会議@仙台2017」が開催されます。世界の防災関係者が一堂に会する国際会議ですが、ここでもスタディツアーやエクスカーション（小旅行）を予定しています。

海外からたくさんのお客に来ていただくためには、東北の魅力や「防災ツーリズム」の意義を世界へ向けて発信することが必要です。私たち研究者は、防災教育面での提案はできますが、観光にかかわるプロモーションや集客についてのノウハウがありません。「防災ツーリズム」は、さまざまな国にネットワークを持つJALや、旅行会社などの協力なしでは実現できない事業なのです。

防災の大切さと、東北の魅力を世界に広げていくためには、多くの方々にご協力いただき、「防災ツーリズム」を広げていきたいと思っています。